

大衆のスポーツ——サッカーとテホ

幡谷則子

スポーツに親しむ庶民

ラテンアメリカで最も庶民に親しまれている娯楽といえはサッカー、ダンスに映画と相場が決まっているのではないだろうか。コロンビアでも同じである。ことスポーツにしほつて考えてみると、陸海ともに多様性に富む地形と気候によって、この国では幅広い種類のスポーツが楽しまれていることが分かる。しかしながら、コロンビアで盛んでかつ世界的に水準が高いスポーツをあげれば、やはり第一位がサッカー、次が自転車であろう。

自分でやるスポーツとしてはむろんのこと、国民のサッカー熱は、観戦者としてのパフォーマンスに表現される。サッカーの試合の醍醐味は、観客がプレイヤーと一体となつてボールを追ひ、そして「ゴール」の時に総立ちになるあの一瞬を共有することに尽きる。プロリーグの

試合があつた日は、目抜き通りはチーム旗を振り、クラクションを鳴らすスタジアム帰りの車であふれ、街全体が、興奮の渦にまきこまれる。

サッカーにみるナ

シヨナリズムの発現

これが選抜チームの試合となると、国民全員がそわそわする。週日に実施されるときはたまらない。訪問先の研究所や役所までもフロアー全員が仕事を中断してしまい、筆者も「おまえも一緒にどうだ」とテレビ観戦に誘われて呆れたものであった。

ましてや四年に一度のワールドカップ出場権をかけた選抜チームに対する国民の期待と興奮は、並大抵のものではなかった。傍観者たる筆者の目には、同国ではめつたに感ずることのできない「ナシヨナリズム」の発現であるかのように映つた。このところゲリラに麻薬密売組織テロと暗いニュース続きのコロンビアにとって、南米A地区代表決定戦で宿敵アルゼンチンに、しかもブエノスアイレスのスタジアムで、それも五―〇で快勝したこと（一九九三年九月五日）は久々の朗報であつた。筆者はたまたまこの時ボゴタに滞在していたのだが、試合当日の日曜日の午後は、通りには人っ子一人見あたらず、おそらく国民三〇〇万人が全員自宅であるいは友人宅に集まってテレビの前にかじりついていたに違いない。筆者も周囲にならって、友人宅のテレビの前で過ごしたのだが、最初の「ゴール」が決まった瞬間、自分のいたアパートだけでなく、近隣の建物全体が「うおーっ」とどよめいた、あの衝撃的な感動が今も体内に残っ

ているような気がする。

勝利が決定してからは、国中が祝賀に酔いしれた。主要都市では自家用車に若者が鈴なりになつて練り出し、お祭騒ぎが高じて喧嘩と交通事故が頻発した。その夜だけで全国で一〇〇人以上の死傷者がでた。同日夜十時、ボゴタ市長は急遽翌月曜日の市民休日決定を発表し、市の公的部門はすべて休業となつた。帰国した選抜チームをボゴタのスタジアムに迎えてガビリア大統領が祝福の演説をし、チームの監督と主将には、コロンビア国民にとつて最高の榮譽である「ボヤカ勳章」が贈られた。大統領の演説は「ビバ！コロンビア！」で締めくくられ、場内の人々の感涙を誘つた。サッカーの勝利はガビリアにとつては明らかにナシヨナリズムの高揚に役だつたのだ。

その他のスポーツ

サッカーに次ぐ人気の自転車競技では、毎年ツール・ド・フランスに代表チームを派遣している。市民の健康スポーツとしても盛んで、首都ボゴタの中央通り（七番街）は日曜日には片側車両通行止めとなり、サイクリングとジョギングをする人々のために明け渡される。

このほか、学生を中心に盛んなスポーツといえば、目下テニスにバスケットボールであろう。また、大西洋と太平洋に二つの海岸線をもつコロンビアはマリンスポーツのメッカでもある。この国でスキーといえば水上スキーのことを意味するし、領内のカリブ海の島々はダイビング

グ・スポットの宝庫である。もちろん、これらはごく限られた中・上流階級にしか手の届かない楽しみではある。

先住民文化起

源のテホ競技

サッカーにしろ、自転車競技にしろ、これまで挙げたスポーツはすべてとは植民地時代以降にヨーロッパから、ないしは近年北米から移入された競技であり娯楽である。ではコロンビア土着起源を持つものは、と探すときわめて限られている。

次に紹介する「テホ(Tejo)」は、まさに先住民文化起源の、かつコロンビアならではのユニークな大衆の遊びである。

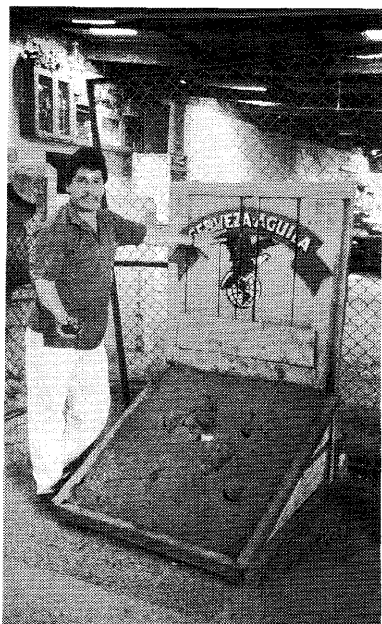
テホは正式名称を「トゥルメケ(Turmeque)」というが、これは先住民チブチャ族の居住地であったトゥルメケ地方に由来している。チブチャ族はスペイン人がコロンビアに到達した当時、現在のボヤカ県や、ボゴタ市を取り囲むクンディナマルカ県などの一帯に栄えた民族であり、テホすなわちトゥルメケは、このチブチャ族が十四世紀頃親しんでいた競技であるとされている。今でもボヤカ県にはトゥルメケという村が残っている。

この競技がテホと呼ばれるのは、遊びに使われる鉄製の砲丸(直径約一三センチメートル)のことをテホと呼ぶためである。テホの遊び方は、定位置から砲丸を的に向かって投げ、その命中度によって点数をつけるといごく単純なものである。「的」は地上四〇センチメートル

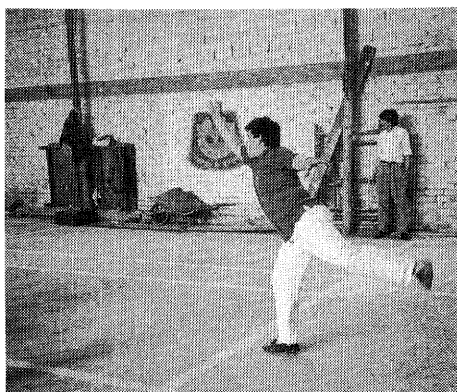
ほどの高さにしつらえられた「ドロの壁」で、投げられた砲丸が粘土状の泥壁に埋め込まれるしくみになっている。

これではあまりにも単純しごくで子供の泥んこ遊びのようにとられるかもしれないが、「的」にはもう少し仕掛があつて、点数の付け方もなかなかふるっている。泥壁の中央には鉄製の円筒が埋め込まれてあり、競技者

は実はこの円筒めがけて砲丸を投げているのである。この円筒をボシン (boon) といい、直径一四センチメートルで砲丸がちょうど入る大きさである。試合の時はこのボシンの周囲に火薬の入った三角形の包 (昔の薬包のような形で、一種の爆竹である。これをメチャ (mecha) という) が置かれ、砲丸がボシンに命中する時、摩擦によってこの火薬が爆発する仕組みになっている。



ドロの壁でできたテホの的。右手に持っているのが砲丸「テホ」



「ボシン」めがけて勝負——
華麗な投球フォームを見せる

ゲームは一对一で、二人一組で行う個人戦かチーム戦かである。点数の高さで勝敗を競う。得点の付け方は、ボシンに当たれば一点（これを一手と数える）、かつ火薬を一つ爆破させれば一メチャといい、これは三手（三点）に相当する。また、テホがボシンの中に入ればこれを一

ボシナーダといい、二メチャ、つまり六手（六点）を獲得する。さらに、ボシンの中にテホが入ってかつ火薬が一つ爆破すれば、これを一マニヨナと呼び、三メチャ、つまり九手（九点）がもらえる。一回の最高点は、ボシンの中にテホが入り、かつ四つの火薬がすべて爆破すると得られるが、これはなかなかできない。砲丸が的のど真ん中に入り込むと、メチャが爆発しないことがあるからである。一勝負は六メチャ、つまり一八点先取制である。

これが今日のルールだが、もちろん鉄も火薬もスペイン人がもたらしたものであるから、チブチャ族の競技方法は異なっていたに違いない。旧来は砲丸には石が、ボシンには竹が用いられていたという。

飲みながらテホに興じる

さて、公式戦でなく、普段遊びで勝負を行う場合は、一回ごとに負けたほうが勝った相手にビールを一本奢るしくみになっている。

つまり、飲みながら試合をするのである。金銭をかけることはしない。もともとテホはボヤカ、カンディナマルカ、サンタンデル地方を中心とする農村部の男たちの数少ない娯楽の一つであった。現在もこれらの地方の村にはきまって屋外にテホの競技場（といっても泥壁があればよい）があり、日曜日には村の若者達が集まってビールを飲み飲みテホに興じるのである。投げ方は砲丸投げと違い、肩に球を背負うことはせず、アンダースローが一般的である。的にめがけて投げるだけの、単純な競技のようにみえるが、テホは公式戦用のもので三・五ポンド（一ポンド＝四六〇グラム換算）つまりおよそ一キロ半となり、これを一八・五メートル先に投げるのにはかなりの体力と技術を要する。

農村から都市へ――

大衆伝統文化の移動

テホの競技場は農村部までいかないと見られないわけではない。主として盛んなのは先にあげた三県であるが、今では全国の主要都市に屋内テホ競技場があり、テホ・クラブとして経営されている。特にクンディナマルカ、ボヤカ出身者が集中する首都ボゴタでは、テホ・クラブは労働者階級にとつてはなくてはならない娯楽施設である。リーグも結成され、全国チャンピオン大会も毎年行われている。これらのテホ・クラブはビール会社がスポンサーになっている。お客はテホのゲーム

をするのにビールで支払をする。まず、テホ（砲丸）を借りるときに、瓶ビールの入ったケース（三〇本入り）をもらい受ける。そして試合が終わった時点で空き瓶の本数を数え、相手に奢った本数で清算するシステムになっている。

ただし、これは遊びの試合におけるやり方であり、公式戦ではアルコールはいつさい禁止である。また、テホは基本的に男の競技であったが、最近では「婦人クラブ」もあり、女子リーグの試合もある。女子用、また老人用の競技場はサイズが小さく、投球距離が七メートル、砲丸もないし一・二五ポンドと軽いものを用いる。

テホは農村の娯楽であり、都市では大衆の、あるいは農村出身者のスポーツであり、ひいては「貧しいものの娯楽」というイメージにもつながっている。実際、筆者が調査した不法占拠起源の大衆居住区では、何軒もの家で、中庭に練習用の簡易コートが作られているのがみられた。まさに農村から都市への大衆文化の移動である。

（はたや のりこ／アジア経済研究所地域研究部）